



日本SPF豚協会だより

Report of JAPAN SPF Swine Association 2011.1.1 第42号



提◆言

飼育環境の新たな方向性

株式会社シムコ 代表取締役 端坊 充央

新年あけましておめでとうございます。年頭に当たりご挨拶申し上げます。

昨年は宮崎で発生した口蹄疫が業界全体を震撼させた一年でありました。被害に見舞われた関係者の皆様には改めてお見舞い申し上げます。幸いにも昨年11月には再生に向け、素畜の導入が開始されたことは、業界にとって非常に喜ばしいことであります。

この莫大な被害とともに得られた経験と知見を活かし、今後の越境性疾病の侵入蔓延対策が国・県・民間が連携して確立されることを期待しております。

さて、今年も養豚業界を取り巻く環境は非常に厳しい状況にあります。デフレを脱しきれない経済環境、海外からの悪性疾病伝搬の脅威に加えて、環太平洋経済連携協定（TPP）への参加が議論されております。農林水産省の試算では、TPP参加による関税撤廃によって豚肉の生産量は70%、生産額は4,600億円の減少が見込まれ、まさに養豚業界にとっては壊滅的な打撃となります。私共は養豚業界のみならず、国内の農業関係者が一丸となって対処していかなければならないと考えております。

一方、国内の豚肉生産性は、PCV2ワクチンの効果もあり回復の兆しがありますが、まだまだPRRSや浮腫病など多くの疾病が生産に影響を及ぼしております。その中であってSPF認定農場の生産レベルは高い水準にあり、衛生対策の方向性の正しさが裏付けられていると思われまます。

しかしながら、私共SPF豚業界も含め養豚生産のさらなる見直しが必要な時期に来ていると考えております。それは、相次ぐ疾病の悪循環によってワクチン

を含む薬剤への安易な依存がまだまだ高く、飼養環境の改善に向ける意識が不足しているのではないかと感じているからです。

たとえば、飼育面積あたりの収量を優先するため、過度な飼育密度、哺育期間や換気量の不足、不十分な空舎期間等、動物の飼育環境に対する基本的な設定が後回しにされ、豚舎環境の悪化を招き、結果的に薬剤に依存する悪循環になっている事例が少なからず見受けられます。

このことは、残念ながらSPF豚農場も例外ではありません。「もともと原因菌がないから無理した飼育ができる」「SPF豚は過密飼育ができる」と誤解されているのではないのでしょうか。PRRSやPCV2、MPSなどが事故の主原因と思われがちですが、大腸菌症など、疾病はいくらでも一般環境から発生します。

冒頭に申し上げた厳しい経営環境において、さらにコストダウンが求められております。抜本的な飼育環境の改善や飼養管理の見直しにより、生産性の向上や薬品費等の削減に繋がるのがまだまだあるのではないのでしょうか？

私共シムコはこれらを踏まえて、新しいGGP農場の建設準備を秋田県において進めております。外界からの疾病感染防止を第一として、豚自身が体力や免疫力をスムーズに付け強く育つ環境を、近代的な設備の中で実現させ、皆様のご期待にさらにお応えしていきたいと考えております。

最後に、皆様のご活躍ご健勝と、今年こそ養豚界にとって新たな明るい幕開けであることを祈念いたします。

研究会との 合同セミナーを開催

2010.11.2 KKRホテル東京



協会では昨年11月2日、東京都千代田区のKKRホテル東京において、日本SPF豚研究会との合同セミナーを開催いたしました。出席者は120名、セミナー後行なわれた懇親会にも100名の方にご出席いただきました。

まず、井上忠恕・日本SPF豚研究会会長の開会の挨拶に続き濱岡隆文・動物衛生研究所所長の祝辞をいただいた後、研究会の総会が行なわれました。

その後、各講演へと移りました。その概略をかいまみでご紹介します。

●日本におけるSPF豚生産システムと SPF豚農場認定制度—柏崎守氏

まずは、協会のSPF豚農場認定委員会の柏崎守認定委員長による講演がありました（以下要旨）。

「SPF豚の生産システムでは、農場防疫が肝心要です。農場防疫がいかに重要であるかは、今年宮崎で猛威をふるった口蹄疫でも再認識されました。養豚生産においては、育種改良、飼育管理および防疫管理の技術が三本柱となります。三つの技術が最高水準にある場合に生産性は最高になります。わが国の育種、飼育管理の技術はかなり確立されてきています。しかし、防疫管理の技術は、まだ低いと思われまます。その中において、SPF豚認定農場の防疫レベルは非常に高いと思います。わが国における養豚生産は、母豚約90万頭から年間約1,600万頭の肉豚が出荷されています。そのうち、SPF豚は母豚で約8%、肉豚で9%のシェアを占めています。

SPF豚農場はピッグフローがコンベンショナル農場（以下コンベ）と違います。SPF豚系は家畜改良の遺伝子を帝王切開で摘出した子豚または受精卵移植により導入します。一方、コンベは外部から生きた豚

を導入します。

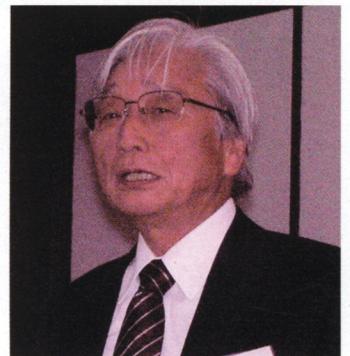
近年、SPF豚農場における飼育システムは変化してきています。従来は繁殖・育成・肥育が同じ場所で行われている農場がほとんどでした。毎年SPF豚認定農場の1農家あたりの平均母豚数は毎年増加してきていま

す。大型化のスピードが加速してきているということです。疾病防除を目指し、オールインオールアウトを取り入れた、ツーサイト方式、スリーサイト方式、マルチサイト方式などの生産システムを取り入れる農場も増えてきました。これに伴い、農場認定の際の成績のまとめ方の検討が必要になるでしょう。

疾病に関していえば、これからはPRRSをフリーにすることに最優先で取り組む必要があります。導入種豚はPRRSフリーであることが必須です。アメリカでも排除疾病の最優先ターゲットをPRRSにしています。

CM農場の認定はヘルスチェックと生産成績の二本立てで行われています。規制対象薬品を決めたことは、SPF養豚発展・推進には有効です。さらに、赤池会長が提唱した、生産成績を指数化して判定するという現在の方法は、良い方法だと思います。今後も認定制度を充実させる必要があります。

この5年間で増えた認定農場の稼働母豚数は8,000頭です。年間平均増加率は2.2%です。全国の年間増加率に比べれば、立派といえるでしょう。しかし、私は、SPF豚はまだまだ伸びる可能性を秘めていると思



柏崎 守・日本SPF豚協会SPF豚農場認定委員会委員長

ます。たとえば、SPF豚を導入しているコンベ農場の認定農場化、既存農場の規模拡大化等の方法が考えられます。10年先には、協会を中心に稼働母豚10万頭規模を達成すべきでしょう。それには、SPF豚普及活動をさらに活発化し、良質なPS豚の生産強化を図る必要があります。さらに、既存認定農場はレベルアップのために、ベンチマーキングを取り入れ、成績改善に取り組んでいただきたいと思います。また、各ピラミッドは指導力を発揮し、改善を推し進めていただきたい。

最後に、私はいつも思うのだけれど、SPF豚生産に携わる人は『SPFピッグプライド』を持っていただきたいと思います」。

続いて恒例となったCM農場の生産成績年次報告が藤田世秀・協会事務局長より行なわれました。



赤池協会会長より表彰状を授与される青木 昇・青木ピッグファーム会長(左)

休憩後、5回目となる生産成績最優秀農場の表彰式が執り行われました。

今年は、総合生産成績、商品化頭数ともに北海道の青木ピッグファームの受賞となりました。青木ピッグファームは総合生産成績で3年連続、商品化頭数で2年連続の受賞となり、昨年に続いて2冠達成となりました。

代表の青木賢一さんに代わって、父親である青木昇会長が遠路はるばるお越し下さり、赤池洋二・協会会長より表彰状とトロフィーを授与されました

青木会長は「本日は名誉ある賞をいただき、誠にありがとうございます。私は、息子に事業を譲るまで30年

間、稼働母豚180頭の養豚経営を行なってきました。正直、自分自身よく仕事に精を出していたと思います。そのせいか、息子に譲ったときに、果たして自分並みに仕事ができるのか不安でした。しかし、息子が引き継いで5年経ちますが、私の不安を見事に振り払い、よくやっているといます。しかし、家庭にいるよりも、豚舎にいる時間ほうが長く、少し心配にもなります。こういう息子ですがこれからもよろしく願います」と挨拶されました。

●北海道のSPF・CM農場とともに歩んだ 20年・ホクレン生産ピラミッド—岩瀬俊雄氏

次に、北海道のSPF養豚の現状について、ホクレンの岩瀬俊雄技監の講演がありました（以下要旨）。



岩瀬 俊雄・ホクレン生産振興部技監

「2009年10月、ホクレン滝川スワイステーション・養豚技術センターにて豚赤痢が発生しました。

正直愕然としました。とっっても、みっともない、だらしない、お恥ずかしい話です。しかし、このショッキングな出来事から、学ぶことも多かったので、ここで皆様にあえて報告いたします。発生原因究明には、多大な労力と時間をかけました。しかし、原因としては漠然としたままで、人、物、野生鳥獣かという推定の域を出ません。

我々は、発生は発生として、事実を受け止めました。今回の事件に対し、

- ①現実から逃げない（直視する）
- ②現実を隠さない（堂々と公表する）
- ③現実を打開する（復活を期す）

の方針を掲げ取り組みました。2009年11月に完全オールアウトによるSPF再変換を決定。2010年3月SPF再変換（清浄化）作業本格化。同年10月SPF再変換（清浄化）作業完了。現在種豚再導入に着手しています。

今回のことで次のような反省点が浮かんできました。

- ①外来者の出入りは、ないのが一番よい。

②病原菌を持ち込まないという意識・心構えが重要。

③消毒に関しては、具体的な消毒場所の指定が必要。特に目に見えない場所、汚れがあるかどうかわからない場所等。

④SPF状態の維持は形式的にやっているだけでなく、それぞれの行動に意味と重要性のあることを十分認識する。

⑤以上を踏まえて、農場全体でバランスのとれた生産活動を行うべきである。

今回のことを踏まえ、ホクレンでは『ホクレンSPF豚ポリシー』を制定し、SPF精神をさらに力強いものにしていきます。また、消費者や販売店に対し『SPFという名の信頼でラップされた豚肉』をお届けするという使命を、強く意識した活動を前進させていきます」。

●豚サーコウイルス2型関連疾病とワクチンおよび農場バイオセキュリティによる農場内コントロール—出口栄三郎氏



出口栄三郎・鹿児島農学部大学教授

最後に、鹿児島大学農学部獣医学科の出口栄三郎教授より、講演がありました（以下要旨）。

「豚サーコウイルス2型（PCV2）ウイルスは自己複製できる最小のウィルスです。全身のマクロファージ、樹状細胞、細網細胞系に感染し、抗原提示不能、免疫機能低下を引き起こし、PCVAD（PCV2関連疾病）の原因となります。

鹿児島県で私が最初のPCVADを見たのは2007年7月で、離乳子豚（50～70日齢）が緑色がかかった下痢症状と瘦削状態を示していました。2008年には3農場でPMWS（離乳後多臓器発育不良症候群）を経験しました。PMWSの農場診断基準（Sordan, 2000）では①離乳豚で発症日齢が生後45～110日齢、②極度の発育不良を示す豚が多数存在（浅ソ径リンパ節の腫大）、③週または月単位の離乳後死亡率が5%上昇すること、とされています。先の3農場はこの農場診断基準に合

致し、PMWS発症農場と診断しました。これらの農場でPMWS豚と確認された豚も、発育正常豚と見られた豚も、共に血清PCV2-ORF2抗体価は高く、全頭陽性でした。さらに、複数のリンパ節からPCV2核酸が検出されました。

PCV2ワクチン接種によるPCV2感染予防および農場内封じ込めの可能性について報告します。本研究に使用したPCV2ワクチンはポーシリスPCVです。子豚（生後21日齢）のみに接種した試験では、ワクチン接種後14日で抗体価は上昇し、以降、出荷まで高い値を維持しました。また、子豚の血清、末梢血単核細胞、直腸内容物、口蓋扁桃、腸間膜リンパにおいてPCV2核酸は検出されませんでした。

また、ワクチン未接種時期の死亡率が15～26%だったものが、ワクチン接種後は1～3%まで改善され、現在も維持されています。次に、母豚（分娩前35日に接種）と離乳子豚（生後35日齢接種）の両方に接種した試験では、母豚、子豚共にワクチン接種後抗体価は高い値を維持し、母豚の血清、子豚では血清、末梢血単核細胞、直腸内容物、口蓋扁桃、腸間膜リンパからPCV2核酸は検出されませんでした。さらに、農場内の22か所からの採取物からもPCV2核酸は検出されておりません。PCV2は豚体内と農場内でよくコントロールされており、現在も維持されています。しかし、PCV2は不顕性感染の状態であることが分かっているため、今後もワクチン接種は必要です。

この結果から、健康な豚を生産していくには、病気にならないようにコントロールするという意識が必要です。すなわち、PCV2ワクチンの母豚、子豚への接種と、積極的な農場バイオセキュリティが有効と考ええます。

今後も衛生管理を徹底したうえで、PCV2抗体価、核酸検出等の追跡調査を継続していきます」。

セミナー終了後行なわれた懇親会では、恒例のSPFポークのしゃぶしゃぶや、骨付きハム・ベーコン・ウインナーソーセージなどの加工品の試食もご堪能いただき、情報交換の場として盛り上がりました。

講師の先生方、ご出席いただいた方々、誠にありがとうございました。

豚サルモネラ症③

東京農業大学教授 山本 孝史

対 策

豚のサルモネラ症の対策は、現実に発症豚がいる場合と不顕性感染のみの場合とで若干異なりますが、両者とも豚舎の徹底した洗浄・消毒を継続しなければ実効があがらないことは共通しています。発症豚がいる場合、発症豚は可能なら淘汰して豚舎の汚染を最小限にとどめるとともに、同居豚には抗菌剤を投与して感染の拡大を阻止します。発症豚の淘汰が不可能な場合は抗菌剤による治療ということになりますが、サルモネラは抗菌剤の到達しにくい細胞内に寄生する上、各種薬剤に耐性を示す菌株が存在することから、結果は必ずしもはかばかしくありません。しかし淘汰ができなければ、ワクチンのないわが国では抗菌剤を用いるほかありません。その方法は、望ましいことではありませんが、2次選択薬であるニューキノロン系薬剤を高濃度で5~10日間連続投与するのがもっとも現実的な方法です。この間、サルモネラの分離を頻回実施して排菌状況を把握するとともに耐性菌の出現を監視します。この際、SCを除く血清型では糞便を菌分離の対象としますが、SCでは白血球中に高率に保菌されていますので、糞便だけでなく血液や鼻腔スワブも検査対象とします。

発症豚の有無を問わず、サルモネラの清浄化には、前述のように農場の徹底した洗浄・消毒を長期に渡り

表1 各種消毒薬の糞便中の細菌に対する殺菌効果

糞便量	消毒薬	10分	1時間	2時間	4時間	24時間
10%	陽イオン界面活性剤	++++	+++	+++	+++	+++
	複合次亜塩素酸	+++	++	++	+++	+++
	次亜塩素酸	++	++	++	++	+++
	複合オルソ剤	150*	80	75	80	19
	蒸留水		5.6 x 10 ⁵ /μL			
1%	陽イオン界面活性剤	++	++	++	+++	+++
	複合次亜塩素酸	42	20	4	5	1
	次亜塩素酸	15	2	10	1	0
	複合オルソ剤	2	4	1	3	5
	蒸留水		5.6 x 10 ⁴ /μL			

*: 残存菌数; +++: >10⁵, ++: 10⁴ ~10⁵

継続して実施することが要求されます。洗浄・消毒と一口に言いますが、基本は洗浄にあることをよく理解することが大切です。このことをご理解いただくために興味ある報告を紹介します。P.J.van der Wolfら(2001)は、サルモネラのリスクファクターを明らかにする目的で353農場について各種のアンケート調査を実施するとともに、各農場のサルモネラ抗体の陽性率を検査しました。その結果、高圧洗浄のみを実施し、消毒薬は一切使用していない農場(91農場)の方が、洗浄後消毒薬を散布している農場(262農場)よりもサルモネラに対する抗体陽性率が低いという結果が得られました。この結果は、著者らにとっても意外だったようですが、このような結果が得られた理由を、消毒薬を使う農場では洗浄がおろそかになっているからであろうと考察しています。表1はこのことに関連した私たちの実験成績です。この実験では糞便を各種消毒薬の10%あるいは1%になるよう添加して一定時間後の菌量を測定しました。その結果、糞便量が10%だと複合オルソ剤を除き糞便中の細菌は24時間後でも全く減少しませんでした。さらに、たった1%の糞便量でも影響を受けています。このように、洗浄・消毒の基本はあくまで洗浄にあるということ深く認識していただきたいと思います。

筆者は、踏み込み消毒槽は二つ用意し、最初の消毒槽中でブラシを用いて靴底等に付着した糞便等をよく落としてから第2の消毒槽に入ることを提案したいと思います。サルモネラ対策の基本は農場の徹底した洗浄・消毒、特に洗浄にあるということをご理解下さい。

<参考文献>

P.J.van der Wolf et al.(2001). Herd level husbandary factors associated with the serological Salmonella prevalence in finishing pig herds in the Netherlands. *Vet. Microbiol.*, 78, 205-219.

◆先進的S P F豚農場紹介◆

農事組合法人八幡平ファーム（岩手県洋野町）

常務理事 大泉 俊昭

リキッドフィーディングについて説明します。

2トンのミキシングタンクが4機、給餌回数は1日8回です。エサと水の割合は1：4、1バルブ50頭で常時1万1,000頭に対し2セットで行なっています。1サイクルが5,500頭、1回の給与時間は1.5時間です。

通常豚は1kgのエサに対し、2リットルの水を飲むはずで、約2倍の水分量です。このリキッドでは4リットルを強制的に飲ませていることになり、増体の問題より浄化槽の能力が通常仕様ではダメだということになります。リキッドを導入されている方はこれで苦労されていると思います。

本来のリキッドの持つ能力を知りたかったので、配合飼料のみで副原料は一切添加していません。今後さらにより副原料ができて、リキッドを使いこなせるようになればコストダウンのために使いたいとは思いますが、副原料はコストゼロでもらえるようなものを3割以上入れなければコストダウンにはつながらず、むしろリスクが高くなるのではと考えています。

リキッドの効果ですが、リキッドを採用していない本社のデータと比較して、11%の飼料減となりました。これはやはりエサこぼしが少ないこと、ロスが少ない。それと吸収能力が高いことだと思います。糞が軟便にならず非常によい状態です。消化状態がいいのだろうと思います。制限給餌が消化吸収能力をあげているのではないかと。1日8回食うというところに起因しているかもしれません。

リキッドは通常の普段給餌より明らかに1割はエサが少なくすむという確信があります。これは非常に大きなメリットだと我々は考えています。

リキッドのポイントは「すぐ溶けて200メートル運んでも分離しないエサがあればいい」「1人でなく多くの人が直せたらもっといい」の二つです。30秒で溶けて200メートル運んでも分離しない、そんなエサがあることが大前提です。また、ややこしい設備なので一人の



大泉俊昭（おおいずみとしあき）
昭和62年岩手大学農学部獣医学科卒業、全農入会。平成16年退職、秋田県の八幡平養豚組合へ。平成18年、母豚1,630頭の最先端設備を備えた八幡平ファームを立ち上げ、長年の夢であった農場経営を実現させた。平成21年4月には肉豚週800頭出荷体制となり、その成績は全国でもトップクラス。日本養豚界のニューリーダーとして期待されている。

専門家に任せてしまうことがあります。そうなる責任者はノイローゼになりかねません。肉豚担当が全員機械を操作でき、トラブルを解決できるという態勢をとらないとリキッドは失敗します。リキッドがダメだと

いわれる場合は大概このどちらかが原因だと思います。

我々の農場では子豚舎での雄・雌の別飼いは意味がありませんでした。それよりも最初に25頭の群をついたらそれを最後まで崩さない、その方が、豚が揃うようです。最終目的である枝重をそろえるためにはこの方法がいいようです。

最後に、最終的によい結果を求めるのであれば、出荷担当の努力だけではダメだということを、あるスポーツにたとえると「ドライバーはフェアウエーをキープして飛距離を出す（確実に週85腹種付し、たくさん産ませる）」、「アイアンでグリーンに近づけ（下痢を出さずにより離乳）」、「アプローチでピンに寄せて（子豚は綿密な環境管理）」、「パターでナイスイン（出荷は体重を読み最後の詰めを怠らない）」、「場長はキャディーさんで何かあれば大きな声で「ファー」（適切な指示）」となります。そして「めざせパープレー（上物率72%）」となります。つまり養豚はゴルフに通じるものがあるなど考えたわけです（笑）。

野球にたとえても同じだと思います。内野を守る華やかな選手が種付・分娩・肥育だとすれば、外野を守るのが施設管理部、糞尿処理や堆肥づくりを担当するメンバー。そこから後ろはいない。失敗してもある程度フォローしてもらえる部門と、そうでない部門もある。一つのチームとして全職員が同じ方向、同じベクトルで仕事をしていかないとダメだと思っています。

● 協会からのお知らせ ●

● 柏崎認定委員長の叙勲お祝い会を12月に行ないました



挨拶する柏崎守・SPF豚農場認定委員会委員長



昨年12月9日、春の叙勲において瑞宝中綬章を受賞された柏崎守委員長をお祝いする会が開催されました。

昨年春は宮崎県で発生した口蹄疫の影響で、さまざまな行事が中止や延期を余儀なくされましたが、栄えある受賞も「大変な時期であり自粛

したい」との委員長のご意志もあり、祝賀の会も延び延びになっておりました。この年最後の認定委員会終了後という機会を利用し、認定委員を中心にごく内輪の会として行なわれたものです。

当日の会場となった東京・お茶の水の「ホテルジュラク」には認定委員、各生産ピラミッドほか約30名ほどが集まり、協会関係者では初となる、柏崎委員長の

受賞をお祝いしました。

冒頭、赤池洋二・協会会長が「委員長の受賞は我々にとっても名誉なことで大変喜ばしい」と挨拶。波岡茂郎・北海道大学名誉教授の音頭で乾杯、協会および生産ピラミッドからの記念品とお花を贈呈しました。

その後柏崎委員長の挨拶があり「波岡・赤池両先輩の努力をムダにはいけないと一生懸命SPF養豚技術開発に取り組んできた。SPF豚協会が日本の養豚界でリーダーシップを発揮できるよう、会員各位とともにがんばっていききたい」とのべられました。誠にありがとうございました。今後とも引き続きご指導・ご協力をお願い申し上げます。

● ポークリーフレットVol.3を差し上げます

ホームページでもご案内しておりますが、SPFポーク促進用リーフレット（A6判、店頭用）第3弾を会員の方に無料で差し上げております。ご希望の方は協会事務局（TEL.03-5835-5375、FAX.03-5835-5376）までご連絡下さい。

● ご意見・ご感想をお聞かせ下さい

『協会だより』へのご意見・ご感想をお寄せ下さい。また原稿も募集しております。皆さま方の声を反映した誌面づくりを目指しておりますので、ご協力下さい。<お知らせ>SPFポークレシピは休載します。

● 認定情報 ●

● 平成22年度認定農場

[12月認定]

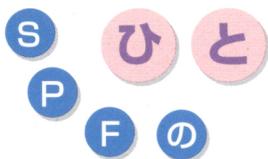
(有効期間:平成22年12月9日から23年12月末日まで)

北海道・ホクレン滝川スワインステーション種豚センター、(有)道南アグロ、富良野スワインファーム(有)、(有)山中畜産千歳農場、(有)中多寄農場、(有)サクセス森、青森県・(有)ふなばやし農産、神明畜産(株)八戸ファーム、(有)ふなばやし農産第3農場、岩手県・(有)ケイアイファウム玉山農場、斉藤SPF農場、(有)胆沢養豚、カワムラSPFファーム、北日本JA畜産(株)本社農場、秋田県・(有)ポークランド、山形県・(有)最上川ファーム、宮城県・(株)しまざき牧場蔵王高原農場、(農)しわひめスワイン、福島県・神明畜産(株)川内ファーム、(株)ユキザワ玉川農場、茨城県・(有)常陸牧場、(有)澤畑養豚センター、

群馬県・(有)長谷井畜産、ピックファームゴカン、千葉県・実川養豚、綱島良信養豚場、高森養豚場、小長谷養豚場、(有)菅井物産SPF農場、長野県・(有)ヤマイチファーム、岡山県・岡山JA畜産(株)吉備農場、(有)エム・ピー・エフやなはら、愛媛県・(株)ユキザワ大川農場、(株)ユキザワ丹原農場、大分県・(株)北九州ジェイエイ畜産大分SPF豚種豚農場、(株)北九州ジェイエイ畜産大分支社SEW安岐ファーム、長崎県・(有)芳寿牧場口之津農場、同国見農場、同島原農場、同新島原農場、(有)エス・イー・ダブリュー大西海ファーム、宮崎県・江夏商事(株)夏尾農場、鹿児島県・(有)サツマ湧水事業部栗野農場、(株)シムコ阿久根GP、そお元気ファーム(株)持留農場、同久保崎農場

(以上46農場)

※次回認定委員会は平成23年3月10日(木)の予定



(有)伊藤養豚 飯岡農場
伊藤 智視さん
●千葉県旭市

夫婦の強い絆で こだわりの豚肉づくり

千葉県旭市といえば関東でも有数の養豚地帯。認定農場も数多くあります。伊藤養豚飯岡農場はその中でも新しい農場で、2003年10月に母豚を導入、現在200頭規模での経営です。車で15分ほど離れた同市内に400頭規模の本農場があります。

飯岡農場を任されているのは、伊藤智視さん・実千子さん夫妻。新農場にSPF養豚を導入したのは、本場の社長だったお父さんの勧めだったそうです。

智視さんは養豚農家のお生まれながら、実は養豚は門外漢。建築設計の専門学校を卒業し、設計事務所に就職。10年経って、職場で知り合った実千子さんとの結婚を考えたとき「あまりにも仕事が忙しく、一緒にいる時間も少ない。好きだった設計の仕事まで嫌になりそうで」と勤めをやめ、農場経営に取り組むことを決意されたそうです。

もともと動物はきらいではなかったとはいえ、本場での研修は半年間、しかも分娩のみ。基礎的な知識すらなく、ゼロからのスタートでした。「まったくの素人で苦労しました。何度もやめよう」と。そんな智視さんを支えたのが実千子さん。農場実務や外部研修、販売先の開拓などを一手に引き受け、まさに二人三脚。さらに従業員、種豚会社、飼料会社、獣医など周囲の人の支えもあって、さまざまな困難を乗り越えて来られ



ました。「ずいぶん遠回りをしたと思いますが、ここ1年ほどはようやく当たり前の成績になってきたかな」。

智視さんが特にこだわったのが肉の味。「食べものなのだから味を追求し、豚を健康に育てたかった」。そこは理系の智視さん、自らいろいろな肉を食べ比べ、飼料をテストし、納得のいく豚肉をつくることに努力を傾けました。「自分自身、豚の脂が苦手だったのが、この豚肉なら食べられるようになった」頃、実千子さんの努力もあって販売先の反応も変わってきたそうです。「知人などに送ると定期購入したいといわれ、リピーターがどんどん増えてます」。今では問屋を一本化し、高い評価を得るようになりました。

今後の目標は「離乳後の死亡率を1%に抑えたい。できれば1頭も死なせたくない」とやさしいお人柄がにじみ出でるもの。「アプローチの仕方が違ってても何かできるのでは。これまでの経験を活かして高いレベルの人達と競い合えれば…」。

夫婦二人の時間を大切にしたいと選んだ道ですが、忙しさは勤め人時代以上。「骨折しても一日で復帰しました」と苦笑いの智視さん。強い絆で結ばれたお二人、ますますの飛躍が大いに期待されます。(編集部)

編集後記

あけましておめでとうございます。あっという間に1年が過ぎてしまいました。今年もなかなか厳しいそうです。昨年の新年号で、コストダウン効果が高い使用薬品類の見直しについて触れましたが、成果を上げられたでしょうか。今号の提言にもあるように、飼育環境の改善が伴わないと薬品の低減は実効性を失うでしょう。さらに、飼育環境の改善は日々の積み重ねです。的確な作業ができる観察眼をレベルアップさせましょう。自ら汗をかいている人の話は心にすんなり入ってくるものです。できない理由を探すのではなく、どうしたらできるのか、その方法を探しましょう。(世)



日本SPF豚協会認定農場産シール

このマークは
日本SPF豚協会の
登録商標です

日本SPF豚協会だより

第42号 2011年1月1日発行(季刊)
発行 一般社団法人 日本SPF豚協会
〒101-0032 東京都千代田区岩本町1-8-2
TEL.03-5835-5375 FAX.03-5835-5376
e-mail : j.spf.a@nifty.com
http://www.j-spf.com/
発行人 赤池 洋二
編集人 藤田 世秀